第35回鳥居賞受賞記念講演　森田昭二氏

　本日はどうも、私たちの授賞式にお見えいただきましてありがとうございます。これから少しお話をしたいと思います。よろしくお願いします。

　私は今日の話のタイトルに『出会いに導かれて』というタイトルを付けたんですけれども、このタイトルでもって、私が今回の受賞の対象になった、博士論文を書くことになった、その第一歩のことをお話したいと思っております。

　私たちの人生はいろいろな出会いを重ねていっているようなもんだと思います。しかし、その出会いの中に、非常に運命を決定づけるような、そういった大変な出会いをすることもあると思います。

　鳥居篤治郎先生が、平方龍男さんと生涯の親交を結ばれた、そういった出会いというものもあります。大変、大きな魂と魂が呼びあったんだろうと私は思います。

　私の出会いは、好本督（よしもと　ただす）。お名前をお聞きになって、ぱっと思い浮かぶ人が、ひょっとしたら少ないのではないかと思いますが。好本督という方と私は、非常に衝撃的な出会いをしました。

　ですが、別に出会ってお話をしたという、そういうような出会いではありません。本を通して、私は好本督に出会ったんです。昭和９年に書かれた『十字架を盾として』という本のある一場面を通して、私は好本督と非常に衝撃的な出会いをして、私が博士論文を書く第一歩を踏み出すことができた、そういう大きな、それは力になりました。そのことを少しお話したいと思います。

　好本督について、少し話さなければいけないんですけれども、それを話すと、とても30分の時間の中には入りきらないので、少し省略して、後で話せれば少し話します。

　どういうことで衝撃的な出会いをしたのかといいますと、好本督は当時、イギリスのオックスフォードに住んでおりまして、彼は貿易の仕事をしておりました。日本に、神戸にその支社を置いてイギリスのラシャを主に扱った、そういう会社です。

　その好本のもとに、ちょうどもう年も迫った、その年の瀬に一通の電報が届きます。その電報はですね、実は彼が開いていたその神戸の支店、その支店を任せていた支配人が、だまされて大きな借財を残して逃亡した。そのために好本のお父さんの財産が没収され、お父さんは持病であった糖尿病が非常に重い状態になって危篤状態になったんだということを知らす電報だったんです。

　その電報を受けて好本は、急きょ日本へ帰ることになったわけですけれども、好本は生来の弱視で、特に夜盲症がひどく、彼はもう暗い中をつまづきながらも、やっとの思いで海を渡ってヨーロッパ、列車に乗ってシベリアのほうを回って帰ってくるわけですが、途中、彼は二人の男にぶつかられ、そのときに、実はポケットに入っていた財布と旅券を取られてしまうという、そんな目にもあいながら、それでもやっとの思いで日本に帰ってきます。

　帰ってくると、お父さんの状態は大変ひどい状態。もうまさに好本は、針のむしろの上に座らされる思いで、何日かを過ごすということになるわけです。

　しかも、翌日から債権者を回って、いろいろと整理を始めるんですけれども、しかし彼の前に立ち塞がる債権者はまるで、トラやオオカミのような、そういった債権者ばっかり。もうどうにもならない、そういう状態でした。

　彼は何日か後、外に出て歩いているうちに、いつのまにか墓地へ紛れ込んでおりました。そして彼はそこで、ああ、この安らかな群れの中に、実は私も子どものころに、ここに入っていたかもしれないんだ。そうだったら、どれほど幸せだっただろうと、彼はそういうことを思ったり、そういう誘惑にもかられたりしました。

　そして歩いているうちに、彼はふと小さな水たまりを見つけました。その水たまりを見てみると、そこに天がそのまま、空がそのまま、くっきりと写っておりました。好本ははっとして、そこにひざまずいて祈りました。ずっと祈りました。

　私はこの場面に出会ったときに、非常に激しい衝撃を受けました。初めてここに、私は好本という人との出会いをした、そういう思いがあります。

　私はそのあと、関西学院大学の博士課程に入って、勉学を励んだわけですけれども、この出逢いが私にとっては非常に大きな出来事であったので、今回、鳥居賞をいただくという機会に、この場面をもう一度、確かめてみたいと思って、実はその好本の自伝である『十字架を盾として』という本を読み返してみました。

 これは、その場面は実はその本の本当に書き始めのところに出てくるので、すぐにその場面へいくんですけれども、実は、墓場へさまよっていった、その場面は出てくるんですけれども、小さな水たまりは出てこないんです。おかしいなあと。

　好本は自伝を、また戦後の昭和24年に書かれた『神に聴いて』というタイトルで出しています。実は、初めの『十字架を盾として』という本は、縁戚にあたる山県五十雄（やまがた　いそお）が好本の日記や手紙を取りまとめて編集して作られた本だったんですけれども、昭和24年、戦後に書かれた『神に聴いて』というのはこれは好本自身が書いている本です。

　あ、そうだ、こっちのほうに実は書いてあったんだと思って、『神に聴いて』を読んでみました。

　墓場のところへすぐにたどり着いたんですが、小さな水たまりは出てきませんでした。私は何で、あのようなストーリーを私は読んだんだろう。それは勝手に私が作ったのか、そんなはずはないと思いました。

　でも、少し読んでいくうちに、糸がほぐれてきました。実はその墓場の場面の後に、好本は何日か後、町で、ある書店で一冊の画集を買いました。彼はその画集を見ながら、心を慰めながら、「これは私を救ってくれる」というように、ふとつぶやきました。ところが好本にまるで神からの声が聞こえてくるように、「それはお前のほんとうの心か。お前はほんとうのものに向かって、そういうことを言っているのか」という、そういう声が聞こえてきました。

　そのときに好本は、はっと思うんです。そうだ、野の小さな水たまり、そこに写っている、それはほんとうに小さな水たまりかもしれないけれども、そこに写っている天は、紛れもない天だ。これこそが本物なのだ。私が向かわなければいけないのは、この本物に向かわなければいけないのだと好本は思うんですね。好本は先ほどの場面のところで長く祈ったんです。

　ひざまずいて長く祈って、そのあと、彼はまた我が家へ帰って、そのあと、彼は債権者にほんとうに誠実に向き合って債権の整理に取りかかった。大変なことであったけれども、でもそれにめげずに、彼はほんとうに誠意を尽していくうちに、いつのまにかだんだんと相手のほうが、好本を理解してくれるようになって、好本は実はその窮境を脱するんですね。好本はただひたすらに、そのとき祈ったんです。そして彼は、そういう窮境を脱したんですね。

　私はそういったことをいろいろと自分の中で、実は大きな意味をもって、何か紡いでいたんだというようなことを思いました。そうだ、私は野の小さな水たまりなんだと、博士課程を目指していた私にとって、好本との出会い、これは盲人福祉の歴史に取り掛かろうとする第一歩だったんですけれども、私はその第一歩で、こういう出会いをしたんですね。

　そして、私は思いました。そうだ、私は野の小さな水たまりなんだ。私はそれ以上の何ものでもないと、それが私に勇気をくれました。

　実は、博士課程に入ると論文を書いて、それを学会誌に出して、学会誌は非常に厳しい査読というものがあります。その査読を通って掲載になる。その掲載にならなければ、博士論文の道は開けてこないんです。だから博士課程に入る人たちは、非常に大きな不安をもって博士課程に入ります。

　私は、いうまでもなく全盲の身ですから、どんな人よりもそういう不安の前にさらされておりました。でも、野の小さな水たまりなんだと自分を思ったときに、私は非常に勇気をもらったと思います。

　そして、そのときに好本が、その水たまりに、長く長くひざまずいて、天に祈った。その祈りを私は、これから先の私の生き方に非常に大きな一つの示唆をもらったように思うんです。

　私の出会いは、実はそういった出会いだったんだと思います。私は見ることはできません。どんなことも見ることはできません。その代わり、聞くことができます。私は聞く、これが私のいちばん、これから取らなければいけない道なんだと。ほんとうに耳を傾けて聞く。それは内なる声を聞く。それは私の、我の声であるけれども、我を超えるそういう声であると私は思います。その我を超える声に耳を傾ける。これが私のこれから先のやり方だということを好本との出会いで、何か教えもらったような気がします。私はそういった一つの大きな出会いをしました。

　博士課程に入って、論文を書いていくわけですけれども、もちろん資料をしっかり読み込んで、そして、そこで初めて聞くということが非常に大きな力になります。私を導いてくれます。そして私はまた、素直に人の意見を聞くことができるようにもなりました。

　私は査読で返ってくる助言を素直に聞きとめて、その助言に従って論文を書き直す。すると、２倍３倍に、論文がすばらしいものに変化している。そのことをほんとうに肌身をもって知りました。それが私の論文を書いていく、大きな一つの支えになっていったように思います。

　私はその先、そのやり方を通していきました。このことについては、もう時間もありませんのでお話することはここで省略したいと思いますけれども。

　最後に、私は今回、鳥居賞というものをこうしていただいて、心に刻む言葉があります。それは論語に「後生畏るべし」という言葉があります。孔子はその言葉の跡に「いわんや来者の今にしかざらんや」（「いずくんぞ来者の今に如（し）かざるを知らんや」？）というように続けています。　つまり、これからやってくる、そういう人たちが、今のあなたより勝っていないということはどうしてあろうか。これからやってくる人たちはもっと、もっとすばらしい、すぐれたそういう業績を積んでいくんだということを、孔子は書き加えております。

　私は最後にこの言葉でもって、私のささやかな博士論文が一つの足場になって、さらにもっともっと展開を遂げて、確固たる盲人福祉の歴史が書かれる、そういう時期が来ることを切望しております。特に障害者、視覚障害者の方にそういった人が出ることを私は夢見ております。

　以上で、私の話を終わりたいと思います。

（終了）